

霍公鳥と藤の花とを詠む一首 并せて短歌

四一九二番

桃の花 紅色に にほひたる 面輪のうちに
あをやぎ 細き眉根を 笑み曲がり 朝影見つつ
をとめ 娘子らが 手に取り持てる まそ鏡 二上山に
木の暗の 繁き谷辺を 呼びとよめ 朝飛び渡り
ゆふづくよ 夕月夜 かそけき野辺に はろはろに 鳴くほと
とぎす 立ち潜くと 羽触れに散らす 藤波の
はな 花なつかしみ 引き攀ちて 袖に扱入れつ 染ま
ば染むとも

四一九三番

ほととぎす 鳴く羽触れにも 散りにけり 盛り
す 過ぐらし 藤波の花